

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2019年6月8日
文責：JUN

「学び合う学び」に取り組むとは？

1 転勤教師の多い学校で話したこと

A先生、転勤してきたばかりなのによくやってくれました。授業が始まってすぐ、すごく力量のある先生なのだとわかりました。子どもへの対応がやわらかいし、何よりも、最初の各自読みで、外国につながるのある子どもが、みんな読み終わっているのにいちばん最後まで読んでいたのですが、その子どもをみんなの前で読む音読の最初に指名しましたよね。そういうところに、すべての子どもへの心配りを感じました。

そのA先生が、グループになって学ぶようにしたら子どもたちがずっとできるので、これはこれまでこの学校でやられてきた力なのだとおっしゃいました。このように感じられたことが素晴らしい！けれども、今日の授業のようなグループでよいのかどうか、それが「学び合い」なのかどうかわからないので教えてくださいとおっしゃいました。とても大切なことで、これはA先生の質問に答える意味だけではなく、この学校の学び合う学びを育んでいくうえで、大切なことです。

(1) 学び合いにおける三つの状態

まず、子どもが学び合うというのはどういう状態なのか、どういうふうに子どもたちが学んでいるのかということについて、次の三つがあると考えてください。一つは、

わからないこと、まちがって考えてしまっていること、それを友だちとのかかわりを通して克服しようとしている。

こういう状態です。「学び合い」は、すべての子どもの学びを実現するためのかかわりです。そこには必ず、わからないこと、できないこと、間違ってしまうこと、浅い考えになってしまうことが存在します。それをそのままにしないで尋ね、尋ねられたら尋ねて来た仲間の状態に寄り添っていっしょになって考えて取り組む、そういう子ども同士のかかわりによって、どの子どもも諦めることなく学ぶことができます。そういう状態が一つ目です。二つ目は、

一人だけで考えていては、だれもがすぐにはわからない課題に対して、互いの知恵を出し合って取り組み発見していく。

そういう学びです。こういうときに先生が子どもたちに提示する課題は、すぐにはわからない、やや難し目のものです。子どもは、やさしいものより、少し骨の折れるものに挑むときのほうが意欲的になります。そして学びも深まります。でも、一人ひとり個別に取り組めと言うと、どれだけ考えて

も一人では道が開けないと匙を投げてしまう子どもも出てきます。けれども、グループで取り組み、どんな子どももその難題に向き合い探究することかできるのです。深い学びを実現するとき、この学び合い方はとても大切です。これが二つ目です。そして三つ目は、

こうだと思っているけどほんとにそれでよいのだろうか、それぞれの考えを出し合ってみよう。そして、こうだと思っていたことがそうではないとか、考えは間違っただけでなく、深くわかったとか、そういうふうになりたい、だから考え合う。

こういう思いを抱いてグループで聴き合う、そういう状態です。子どもたちは、その思いの通りになると、学び合っただけでよかったと実感します。

この三つは全く別の「学び合い」の状態ではなく、このうち一つがあらわれるグループの学びもあれば、重複してあらわれるものもあります。

(2) 学び合いは聴き合い

ここではっきりしておきたいのは、事前に一人ずつに考えを持たせておいてそれを出し合うということでは「学び合い」にはなりにくいということです。書かせてからとか、まずは一人で考えさせてからとかすると、それぞれの考えの発表会になりがちだからです。もしまずは書かせるからとすれば、こういうことにならない手立てを講じなければなりません。

それから、「学び合い」は話し合いではなく「聴き合い」だということを耳にしてこられたと思いますが、それは、「学ぶ」ということは聴かなければ生まれませんからそう言っているのです。できた子ども、わかっている子どもがしゃべっているだけのグループは、しゃべっている子どもに学びは生まれませんし、聴いている子どもも自分から尋ねたり、自分のわからなさを出したりしてないと学びが生まれません。こういう状態は学び合えていないと考えなければなりません。

もちろん出された課題に対してすでに考えが出ている子どももいます。そういう子どもが自分の考えを出してはいけないということではありません。けれども、まだわからないでいる子どもがわからなさを尋ねたり、尋ねられたら自分の考えを一旦置いて友だちのわからなさに寄り添ったり、自分の考えとは異なる考えに耳を傾けたり、考えを比べあったり、という子ども同士のかかわり合いがなければ学びは生まれません。そのようにしようとすれば、どの子どもも、仲間の言葉に耳を傾けるはずで、それは「聴き合おう」という意思があるということです。その意識が強ければ強いほど深い学びが生まれます。

(3) よい課題が必須

ところで、先ほど、学び合う状態の二つ目に「やや難しめの課題」ということを申し上げました。このことがとても大切なのです。深い学びになるかどうかの半分が課題の良し悪しで決まるからです。どれだけ学び合うという状態ができていても、課題のレベルが低く、すぐわかってしまったり、あまり魅力を感じないようなものだったら、「学び合い」は深まらないからです。

では、どういう課題がよいのか、それは、こういうものですよというようにここで言うことはできません。その教科・題材の本質的なものを突き詰めて、研究していただいて、そのうえで、自分の学級の子どもたちに適合するかどうかの判断をする、そうして初めて課題として取り上げることができるのです。

(4) 職員室も学び合う学校に

今、行っている「学び合い」が、私が言っているようなものになっているかどうか、そのつもりだけれどそうではなかったらどうしようと思われるかもしれません。そして、このままのグループの学び合い方を続けていってよいのかどうかという不安もきっとあるでしょう。

子どもたちに取り組ませる課題についても、どうしたらそういう課題が見つけれられるのだろう、こう考えてみたけれどこれでよいのだろうか、などと悩まれることはきっとあるでしょう。

けれども、そういう不安も悩みは、とっても大切で、よいことだと言えます。

これまで、学校内の授業研究というと、学年の全教員で取り組んで、1組が研究授業をするのであれば2組や3組でやってみるという「先行授業」なるものが行われていました。けれども、そのような取り組み方は私がお話したこととどこかずれていると気づいていただけたでしょうか。

「先行授業」は、よい授業にするためのものではないでしょうか。間違いのない結果をだそうという意識がそこに働いているからです。それには一度二度とやってみないとわからないというわけなのでしょう。気持ちはわかります。けれどもそこに大きな落とし穴があります。授業は唯一無二の教師が、唯一無二のその学級の子どもとつくり出す唯一無二の事実です。つまりどこの学級でも同じになるはずがないのです。それなのに、先行授業をすればするほど、いつの間にか、「こうなるはずだ」という勘違いを生みだしてしまうのです。いえ、そんなこと思っていません。自分のクラスで授業をする参考にしていただけです、とおっしゃる方もおられますが、それでも、かなりのところまで先行授業の結果に縛られています。

とは言っても、研究授業をすとなれば、どれだけ考えても、これでよいのだろうかという不安感が生まれるのは当然です。ましてや、A先生はこの学校に転勤してこられて、これまでになかった「学び合う学び」に取り組まれているわけですから、不安や悩みはあるに決まっています。ですから、これまでこの学校にいた人が授業をして見てもらえばよいのではないかと考えられたのは理解できます。そのおかげで、A先生も少し気持ちが落ち着かれたことでしょう。それでも、これでよかったのだろうかとおっしゃいました。そのように考えていただくのは素晴らしいことです。

このような不安や悩みは同僚の先生方と語り合い聴き合うようにしたいものです。子どもたちの学びがわからなさや間違いから生まれ学び合うのと同じことで、教師も、不安があり悩みがあるから学び合うのです。研究授業をよいものにするための「先行授業」に精を出すよりも、そのほうがずっと大切です。もちろん、先行授業ではなく同僚同士授業を見合うことが大切なことは言を俟ちません。

「学び合う学び」を実現するということは、教師も職員室で学び合うということです。この学校にいる子どもたちも先生方もみんな学び合っている、それが「学び合う学び」の学校です。どのような授業方法をとれば「学び合う学び」になるのかと考えて形を追う学校にするのではなく、子どもたちも、先生方も、皆さんが学ぼうとしてつながり合っている、その気持ちが満ち溢れている学校が「学び合う学び」の学校です。

一人の子どもも一人にしない学校 一人の先生も一人にしない学校

この学校をそういう学校にしていきたいと思います。一年の最初に、こういうことが皆さんと確かめられたということは素晴らしいことです。A先生にお礼を言わなければなりません。

2 ある学校における子どもの変化

これは、A先生が授業をされた学校とは別の学校において生まれたことです。

その学校にかかわるようになって2年目を迎えていました。私が訪問するまでは、その学校においては、子どもが学び合う授業にするための取組はやられていたようですがそれほど進んでいませんでした。ですから、どちらかと言うと、どの子どもの学びもよくしようと、先生方が一生懸命に子ども一人ひとりにかかわっておられるという感じでした。しかし、その授業は、どうしても教師の指示と発問によって子どもにわからせる授業になっていたのです。いわゆる一斉指導型授業です。

一斉指導型授業がすべてよくないというわけではないでしょう。けれども、一人の教師がすべての子どもに一斉に取り組ませる授業形態だと、どうしても個々の子どものわからなさへの対応が不十分になります。子どもの内に生まれた素敵な気づきも埋もれたままになりがちです。そして、何よりも子どもと子どものつながりが弱く、子ども同士で取り組む爆発的な学び力が出てきません。

その学校の校長先生は、中学校で長く勤務してこられた方でした。ですから、小学校の、しかも教科の授業については経験が乏しく、いま、勉強していますとおっしゃっていました。ただ、中学校における生徒指導の経験から、子どもの状態は実によく見ておられました。

昨年度、何度か訪問し授業を見せていただいたとき、その校長先生は、高学年の子どもの状態に憂慮されていました。そして、そういう状態が、子どもと子どもがつながり合って学ぶ「学び合う学び」を実践することによって改善されるという私の考えに耳を傾けてくださいました。こうして一年が終わる頃には、「学び合う学び」の授業づくりと生徒指導は別のことではないという考え方をおっしゃっておられました。

新しい年度に入り、最初の訪問が先日ありました。

そのとき、6年生のすべての学級が、グループになって学習課題に子どもが取り組む授業を実施していたのです。どの教室に入っても、学んでいるのは子どもたちでした。グループのなかで言葉が飛び交っていました。何かがわかっていく喜びを表している子どもも何人もいました。あきらかに、子どもたちの表情も、態度も、昨年とは異なっていました。

この日の放課後、先生方が集って協議会が開かれました。その冒頭の校長挨拶で、校長先生が次のようにおっしゃったのです。

「すべての子どもが学ぼうとする授業にするには、一斉指導型授業ではもう無理です。6年生の授業を見て、そのことがよくわかりました」

中学校は小学校以上に一斉指導型授業になる傾向が強いのではないのでしょうか。その中学校にいた校長先生が、全教員の前ではっきりこうおっしゃったのです。それほど、この日、目にした6年生のすがたは良いものに映ったのでしょうか。ある意味、それは確信に満ちたものだったのだと言えます。

一斉指導型授業では、子どもを個人的にがんばらせることはできるかもしれませんが。けれども、すべての子どもがしっかり学びに取り組めるかという点と難しいと言えるでしょう。人とかかわり合いを味わい、他者と共生することの大切さを実感させることも難しいでしょう。そして、何よりも、すべての子どもを学びに夢中にさせることは難しいのです。校長先生が目にした、教室中のすべての子どもが学びに向かっている様子は、生徒指導的な指導では得られないものだったのではないのでしょうか。「学び合う学び」は、子どもにとって必須のものなのです。